

れない。

ところで、草木を折り取らせないやうに、その理由をさういふかは一才問題になる。先生が折角く植ゑたのだから……。お金を出して植ゑさせたのだから……。公共のものだから……。草木が痛いさいふから……。草木が可愛さうだから……。まだくいろくあるかも知れない。それは、先生の御手柄次第のことで、これでなければならぬさいふこともないが、幼児の訓練としては、さて何んさいひませうかな。

第三週

登園の仕度をぐづぐずしないことさいふのは、幼稚園内

誘導保育

第一週

蟲の家

長い二ヶ月のお休みも過ぎて、愈々第二学期が始まる。

生活でなく、家庭生活であるが、夏休み後、一寸は興味が蘇つたが、又この頃少しだけ氣味にもなるさいふところから、心得さして話して置く注意である。

ところで、斯ういふ注意を一般的にした方がいゝか、或は御意見もあることであらう。なんなら、各々の家庭についてその様子をきいて、そんな子が無いのだつたら、勿論いらぬ注意である。一人二人なら、その子に個人的にやさしく注意したらいゝことでもあらう。しかし、實際はなかく多い。さうだつたら、皆に對して注意した方が効果があるさいふものである。

先生も、子供も、子供達の親までもが皆、久々に相會ふ事の嬉しさに、懐しさに、胸を躍らせながら、足をはつませながらやつて來るのである。併し、子供さ言ふものは何

云ふ淡い表情しかないのだらう。思ふ事は一杯で、前日から、前々日から、いやもつゝ前の幾日からか、第二學期の始まるのを指折り數へて待つて居た云ふのに、そしてその待ちこがれたその時が来たと言ふのに、子供等はたゞ物珍しげな眼差で、幼稚園を、保育室内を一瞥するだけなのである。その中に早くも開かれたドアの外に見える意外の物を發見する。それは倉橋主事の心からの贈物、芝は苜蓿に、茂るがまゝに残されてある心入れの贈物、――雜草が即ちそれだ。そして、その繁みの中に、蟲さへ飛んで居るではないか、子供等は昨日までの長い間を、離ればなれに過した同志だなきゝはさても思へぬ心安さで、傍の人を誘つて庭へ出る。飛ぶ飛ぶバッタ、居る居るコホロギ、もう子供達は夢中だ。

「先生！蟲を入れる袋頂戴！」

「袋頂戴」「袋頂戴！」

そつちからもこつちからもこの聲で、先生は大多忙だ。兼ねて、こゝういふ事のあるのを覺悟して、丹念に取つてあつた

封筒も、次から次の申出でに忽ち拂底してしまふ大實行き。その中に子供達も、袋にばかり入れ込んでしまふのが、つまらなくもなるのであらう。誰が誘ふでもなく六七人が一組になつて、砂場のそつちにもこつちにも、積木の蟲のお家が建築される。そして逃げない様に言つて砂の土堀さへ廻される。

又先生を加へた一つのグループでは、嘗つての毛蟲等の飼育用に備へられた硝子鉢が持ち出されて、その中にみんなの袋の蟲々が入られる。砂が運ばれる。草が入られる。茄子だの胡瓜だのき、觀察味も加へての飼育が始まる。家が出來て蟲が飼はれゝば、之だけでは足りないからつゞ取つて來やう、又蟲採りの方へ熱中すると言つた工合。最初の一日二日は之でも濟むであらうが、三日目あたりからは、こちらも一人々々に捕蟲網が拵へて與へ度くなるし、子供も作つて作つてませがむ様になる。そこで、カンレーシヤの布で袋が縫はれ、針金の口がつけられて、稍々長い竹の棒の先に固着されて、一人一人の捕蟲網が出來上る。出來上つた一つの見本を見た子供、殊にも男の子なき

は、自分の網の出来上るのが待ち切れないで「僕の未だ？、早く作つて」、ミ側を離れずにねだる。網が出来ると今度は一人一人の蟲の家を、何處へでも簡便に持ち運べるものが與へ度くもなるし、子供側としてはこれがまたこの上もなく欲しい物であるに違ひない。

この個人の蟲の家は、やはり空箱利用が便利だ。夏の間、たまつたアイスクリームの空箱等絶好のものだ。ご叮嚀に取手のリボンまで附いてゐるので。之は空箱の種類に依つて、どこへかはつきり言へないが、適当なところに覗き穴を作つて、これにカンレーシャ等を貼つて置く。蟲を出し入れする口は、逃げられない様手早にする必要があるので、極く簡便に出し入れの出来る工夫がなされなければならぬ。それにはやはり適當の所に三方に切れ目を入れ、附いて居る一方にカンレーシャの細布を貼つて、頻繁なる蟲の出し入れにもかなり堪へられる様堅牢にして置き度いものである。この個人蟲取り網、蟲の家作りはこても忙しい。大人總出で、一生懸命作らねばこても間に合はない。一人一人の網や蟲の家が出来ると、幼稚園庭内のみ止つて

は居られなくなつて、本校校庭や寄宿舎裏の岡までも遠征する事がよくある。この時いつも思ふ事であるが郊外の幼稚園、地方の幼稚園では先生も子供達もこてもお仕合せでお羨しい。力一ぱい駆け廻れるし、根限り蟲探りに興じられるからである。

おそらく、今週一杯はこの蟲取り、蟲の家作りで終始するであらう。この案は、先生が立案計畫して、その中へ子供等の興味を誘ひ導き入れると言ふ、今迄の誘導保育案は些か趣を異にして、子供達の間でおのづからまこまり、發展してゆくと言ふ意味合のものが多くなつて居る。

この案に對して保育者として意圖せられる教育効果はどんなものか考へて見るに、動物に對する愛撫、觀察の二つ。愛撫が過ぎて残酷なる事が間々ある事であるから、よく注意してゐてたしなめる心組を忘れてはならない。

繼續する期間は、おそらく秋も末に近く、千草にすだく蟲の音のうら淋れる頃までも續くであらう。併し、蟲、蟲で、蟲が念頭第一を占める期間は二週間位で、あこは次第に興味は薄らいで来る。

第二週

蟲の家完成

積木のお家も、いろいろに工夫が凝られて、出来る丈は出来てしまつた様だ。

一人々々の捕蟲網も、蟲の家も出来た。子供達の蟲に對しての興味は、何の不足も、又妨げるものもなく充分に満喫させられたわけだ。これからは段々興味が薄らいで來る。蟲の家完成はこんな意味で言つた事で、一つの構想を持つた家が、この週で完成する云ふのではない。

秋祭り

秋は諸所の鎮守社の祭禮があるが、分けても九月は盛んにある。東京でもその土地々々の鎮守社の祭禮が九月には入るミ行はれるので、十一日の第二學期始業の頃には、方方の、トントコトントコの大鼓の音がこの幼稚園にまで聞えて來る。子供達は家にあつては、自分の家の鎮守社のお祭りを見聞きしてゐるし、登園の途中でも、よく見て來てゐるので、子供等の心の中には、御輿に對しての興味、――

作つて見度い、それよりも擔いで見度いの興味が、鬱勃として潜んでゐるに違ひない。こんな所を狙つてこの案は立てられた。

御輿の胴體は、樽か、木の空箱の深いもの、或は笊の様なものを利用した方がよろしい。これを元にして全體の恰好、飾り等の製作を、實際のお輿を見て來ては進める。全體の土臺の形は主に先生、子供は飾りを作る。飾りは黒のラシヤ紙に金紙又は黄の模造紙等を蒔繪式にあしらつて作り上げる。御輿の頂上や屋根の四ツ角にある鳳凰等も子供らしい出來が面白い。御輿の下部に擔ひ棒を二本つゝ交叉して四本つける。これが出來上るミ、子供達は我も我もミ擔ひ棒にこびり附いて擔ぎまわる。ワッシヨイ、ワッシヨイミ掛け聲の勇ましいこゝ、本格的なこゝ。この有様を見るミ、絆纏までもミ凝らなくとも、花傘位は拵へてかぶらせて見度くなる。そこで花傘製作ミ言ふ計畫が立つ(手技参照)、これの期待効果は行事に對する興味、觀察、製作。

お月見

陰曆八月十五日は年によつて違ふけれども、多分この週

あたりに来るであらう。この日は普通にお名月様さも言はれ、お團子、栗、柿、枝豆、芋、御酒その他薄等の秋草をお月様にお供へして、月を賞でる事が古から行はれて来た。又この日は芋をゆで、食するので、芋名月さも言はれる。

私共はお團子や柿栗等、自分達の好きなものが真ん圓い鏡の様なお月様に供へられるばかりか、そのいろ／＼のお供へ物のお下りは、後で頂けるのでぎんなにこの日の来るのを待つた事であつたらう。今でも何處の家庭でも、こりわけ子供のある家庭では盛に行はれてゐる。

幼稚園では、保育時間中即ちお晝の間に行はれるので、御主人役のお月様は、人工的にこしらへられなければならぬ。いつもは、黒板に、大きなお月様がお山の間からぬつくりさお出になつた所が描かれたり、黄色の紙のお月様が森の上へお出になつた所が工夫されたり、數人の子供達の相談によつて、子供等の思ひのまゝのお月様が出来たりする。

扱て今度はお供へ物であるが、粘土が最適の材料であら

う。

お團子は誰もが最も得意とする所なので、大きいお團子、小さいお團子が忽ちの中にお三方に山盛りになる。柿、栗、芋等は、實物の柿、栗、芋等を見ながらの粘土製作。

或は又晝用紙等に、お供へ物の各種が描畫探色されて切抜かれ、之を少し斜めに立つ様に工夫してお盆に盛られてもいゝ。或はちり／＼或はお菓子(紙の)等も、思ひ思ひのお供へ物が出来上つたら、今しがた出来たお月様の前に机を出し、それに、花瓶にさした秋草と一緒に、このお團子、果物等を盛つたお三方が供へられる。

期待効果は、家庭年中行事の興味、觀察、製作。

繼續作業時間はこの日一日。

第三週

お輿、花傘等、先週からの繼續作業はこの週で先づ完成。未完成の中から、ワッシュヨイワッシュヨイ擔き廻つてゐたのが、花傘までが出来上つたので一入興味が強く、暫くの間は、このお祭り遊びで幼稚園のお庭は賑はふ。